コロナ禍における呼吸器疾患ネットワークの構築と運用

神戸大学医学部附属病院
西村　善博

事業の背景

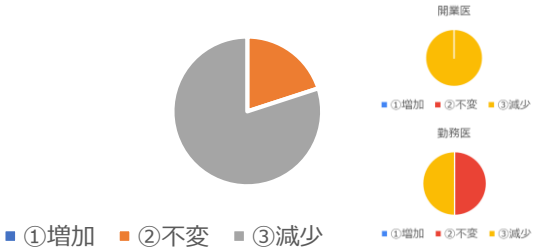
兵庫県は全国平均に比較し、喘息による死亡率が高い。
喘息および慢性閉塞性肺疾患の症状をコントロールするうえで、
患者に適切な吸入手技の習得とアドヒアランスを維持させることは極めて重要であり、
喘息の急性増悪を抑制し、生命予後を改善させることが報告されている。
しかしながら、そのためには、定期的な通院、継続的な指導、診療が必要である。
現在、新型コロナウイルス感染症が世界的に猛威を振るっており、患者が感染を恐れて
通院を控えるいわゆる‘受診控え’が全国的に問題になっており、特に喘息診療の
特性から、喘息患者のコントロール悪化につながっていることが予想される。

目標

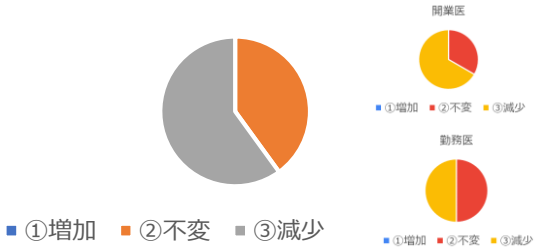
① 呼吸器疾患ネットワークの兵庫県下での拡充を図る。
② 診療控えによりコントロール不良となっている患者に対する地域の医療資源の効率的な提供を図る
③ 対外的な発表を通して認知度を高めて、全国的な普及を図る。

兵庫県下の勤務医と開業医に行った実態調査の結果

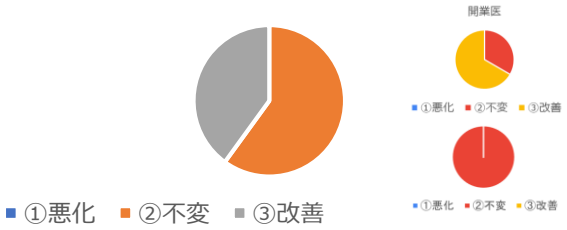
新型コロナウイルス感染症流行後の患者数



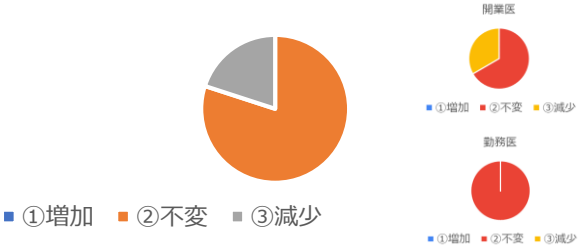
新型コロナウイルス感染症流行後の「喘息」患者数



新型コロナウイルス感染症流行後の喘息のコントロール状況



新型コロナウイルス感染症流行後の吸入指導に費やす時間



事業の効果

勤務医の半数、開業医の全員がコロナによる患者数の減少を
自覚しており、喘息患者の通院も減り、吸入指導時に困難を
感じているなど、兵庫県下の医療現場におけるコロナ禍の
診療実態・新たな問題点などについて、情報を収集し、
共有することが出来た。コロナ禍でのより一層の病診連携の
重要性も浮かび上がらせることが出来た。またこれにより、
問題点を解決するための具体的な方策（患者への啓もう活動、
吸入指導時の感染対策）を立てることが出来、より大規模な
実態調査を行うための準備も整った。

今後の展望

呼吸器疾患ネットワークを兵庫県の全地区に拡充し、
コロナ禍で受診控えとなり、コントロールが
悪化していることが予想される呼吸器の慢性疾患の
実態調査を行い、喘息ノートの応用や、医療圏を跨がずに
2次医療圏内やスモールエリアでの呼吸器疾患診療が
完結できる体制を構築するなど、診療所や地域の病院と
連携した効率的な患者サポート体制の構築を目指す。